

03・夜中、民宿の部屋にふたりきり

『02・ご挨拶』から数時間後。

とある年の夏。七月二十七日（月）二十一時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

涼しく、心地よい夏の夜。

場所は、民宿内、現在主人公が自室として使っている部屋。

ここは本来宿泊用なのだが、伯父と伯母が、主人公が自分達に気を遣いすぎないよう、また、ある程度ここで自由に生活できるよう、特別に使わせてくれているのだ。信じられないほどにいい人達である。

主人公はそんな二人の優しさをかみしめつつ、滞在中プライバシーを確保してもらえて
いる喜びに包まれて、布団の上で一人読書をしている。

夕飯後は、もう就寝まで一人で過ごせるのでありがたい。

というか、さつきだって、帰宅の挨拶をするのが恥ずかしいだけだった。

だから、さっさと帰ってもよかったのだが……。

主人公、思う。

ここでの生活は快適だ。最大限に尊重されている自覚がある。

……でも、なんだか居心地が悪い。

大切に扱われているとわかっているからこそ、こんな風に思ってしまう事自体が、なんだか申し訳なくもなる。

正直に言えば、淋しいし、退屈だし……ここで何をしていたらいいのか、よくわからないのだ。

——いや、本読もう。本。明日の事は明日考える。

主人公、気を取り直そうと、本のページをめくる。

ここに来る途中、古書店で買った小説だ。

主人公のお気に入り作家の本である。

だが、その作家の主な活動時期は十年ほど前と、少し古い。

今も活動しているらしいが、以前と比べ、執筆ペースはすっかり落ちてしまったのだ。ゆえに、全盛期の作品は少し手に入れづらくなっている。

図書館にも、置いてある本と置いてない本がある位だ。

だから、主人公は偶然見つけたこの一冊を、大切に読んでいたのである。

ネット書店が使えれば、旧作は一気に揃えられるだろう。

だが、それは両親に頼まなくてはいけないので手間だ。

それに、それができない理由は他にもある。

今はそれはまあ、いいとして……。

主人公、すでに何度も読んだ本をまた読みながら、あの子の弥映を思い出す。

あれから主人公は、弥映をこの民宿まで連れて行った。

そして、伯父伯母に弥映を紹介し、ひとまず今晚弥映はここに泊まる事になったのだ。た。た。

その時の弥映はとても良かった。

直前まで彼女に振り回され、乱れに乱れていた主人公の気持ちを、すっと、一気に落ち着かせるほどのものだったのである。

主人公は当初『弥映が二人に無礼な態度を取ったらどうしようか?』と、内心ヒヤヒヤしていた。

だが、それは杞憂だった。

実際の弥映は非常に礼儀正しく、丁寧で。

主人公と話していた時の、くだけた感じは完全に消し去っていて。

いかにも『大人の社会人女性』という感じで終始真つ当な応対をし、主人公はこれに、また訳もなくドキッとさせられたのだった。

……ふん。

さつき仕事は『なんもしてない』『無職』って言ってたけど、あれも嘘っぽい。

だって、あれは全然そんな感じのしない、きちんとした対応だった。

きっと本当はただの夏休みなのに、適当に私をからかったんだ。

……いや、これは穿ちすぎか。

冷静に考えて、お仕事を辞めたばかりってところかな。

だから時間ができて、変わってるにもほどがある感じで、こんなところに来たのかな。

あんな綺麗な人が、一体何しに来たんだか……。

主人公、弥映の正体を推理しつつ、さらに先ほどの事を思い出す。

それだけではない。弥映は伯父伯母に対して、随分と主人公の事を褒めてくれた。

河原で実際に交わした会話はあんな感じだったのに、しれっと笑顔で

『本当に親切な方で。彼女のおかげでこちらへ来られました』

『ご案内してただけて、とても助かりました』

なんて、目の前で言われたら……。

人の世話を焼く事が、もはや癖になっている主人公も、嬉しくならざるを得なかった。それがまた、なんだか面白くないが。

……あと、雑誌の件は本当に秘密にしてくれたし。

空樹さんって、ちよつと適当な感じの人って思ったけど……。案外きちんとしてるのかも。

いや、ダメダメ。あの人、美人だからって絶対に調子乗ってる。

ニコニコしてお願いすれば、たいていの事は聞いてもらええると思ってるそう。

絶対そう絶対そう絶対そう。

主人公、らしくもなく、根拠のない推察を続ける。

何というか『そういう事』にしておきたいのだ。

でない、自分は弥映の言葉や態度を真に受けてしまう。
ではなぜ、真に受けてはいけないのかというところ……。

※音声ここから※

SE1 主人公が小説をめくる音

【最初から最後まで流す】

5秒ほど沈黙。

SE2 弥映が木の扉をノックする音

【最初から最後まで流す】

と、そこで、ふいに部屋の扉がノックされた。

※ドア越しで声がこもる。これは、編集でこの効果にする

●中央 少し遠い

「優しく、少し楽しそうに」

ね。入っていい？　まだ起きてるでしょ？」

弥映だ。

主人公、驚く。

正直なところ、案内したら、自分達の関係はもうおしまいだろうと思っていたのだ。主人公は、弥映が自分のような年下の少女に、必要以上の関心を抱くとは思っていない。たとえこちらがいくら弥映の事を気になっていたとしても……もう、向こうからは、あいさつ程度しかしてこないだろう。そう考えていたのだ。なのになさか、また彼女の方から接触してくるとは……。

一体、何の用事だろう？

あ、サンダルの事とか？　……それなら、あげるって言ったのに。

主人公、不思議に思いつつも本を置き、布団から起き上がって扉を開ける。

SE3　主人公が布団から起き上がる音

【最初から最後まで流す】

SE 4 主人公がドアへ向かって歩いて行く音

【最初から最後まで流す】

SE 5 主人公がドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「こんばんは……？」

● 中央

「嬉しそうに、ホツとした声で」

こんばんは。

【少し間をあけてから。嬉しそうに、ホツとした声で】

よかったあ。部屋間違っなくて。

【布団の上の本に気づいて。まだ何の本なのかはわかっていない】

本読んでたんだ。今大丈夫？」

〈主人公〉

「……いい、ですけど」

主人公、内心ドキドキしながら頷く。

すでにお風呂に入ったのだろうか。弥映からはとてもいい匂いがする。

●中央

「【声は落ち着いているが嬉しそうに】

やったあ。

ほんとにあんたも民宿の中に泊まってるんだね」

主人公が了承するとともに、弥映はスリッパで部屋の中に入ってくる。サンダルは手に持っていない。

という事は……サンダルの件で来た訳ではなさそうである。

SE 6 弥映が部屋の中に入ってくる足音

【最初から最後まで流す】

●中央

「少し間をあけてから。民宿のHPを見たことを話す」
さつきスマホでここのサイト見たけど。

この部屋って、一番立派な客室じゃない？
大事にされてるんだね」

ふーん……。

どうやら、弥映は観察眼も悪くないらしい。

先ほどの、四人での短いやりとりと、主人公の待遇を見て、主人公と伯父伯母の関係を理解したようだ。

確かに大事にされている。大事にされすぎているくらいだ。

〈主人公〉

「……はい。『その方が気を遣わないだろう』って伯父さんと伯母さんが。
だから、基本はここで好きに過ごさせてもらってます。

ご飯は一緒に食べてます」

● 中央

「自分の認識があっているか確かめようと、主人公の言った内容を復唱していく」
へえ。

じゃあ、普段はお客さんみたいにこの部屋で自由に過ごして。

ご飯の時は伯父さん達と一緒に食べてるんだ。

VIP（ビップ）だね」

〈主人公〉

「はい。そんな感じですよ。」

空樹（うつろぎ）さんは、どちらの部屋に泊まっているんですか？」

主人公、本当はどこに泊まっているか知っているが、あえて聞く。

『自分は弥映の宿泊室を知らない』。

そういう事にしておきたいからである。

● 中央

「隣の部屋に泊まる事を伝える」

あ。あたしはね。隣に泊まってる。その方がいいだろうって言ってくれて。

「主人公が自分を名字で呼ぶのが気になる」

ていうか弥映（やえ）でいいよ。
敬語も使わなくていいし。

『ここにお世話になってる身』って意味では対等でしょ？』

……へえ。この人、ずいぶんと変わった事を言うんだな。

主人公、きよんとする。

確かに自分達は、その点では対等だ。

だが、弥映の方が、主人公よりもずっと年上だろう。

そんな目上の相手に、ため口で話せるほど、主人公は礼儀知らずではないのだが……。

彼女がそれを望むなら、そうもいかないか。

〈主人公〉

「……じゃあ、弥映さん？」

● 中央

「【少しわざとらしく、残念そうな声を出す】

『弥映さん』？　なんか固くない？」

だが、弥映はこの呼び方でも気に入らないようだ。
不満そうにしている。

参った。呼び捨てなんて考えられないから、それならもう選択肢は一つしかないが……。

——それじゃあまるで、同年代の友人みたいじゃないか。

〈主人公〉

「じゃあ弥映ちゃん」

● 中央

「『『ちゃん』づけが少し意外で驚く」

『弥映ちゃん』？」

主人公が照れ臭そうに早口で言う、一気に弥映の顔が明るくなる。
『きやはっ』と、少女のように笑う。

主人公はそれが恥ずかしい。

●中央

「だが、それが主人公らしいような気がして嬉しくなる」
ふふ！

「嬉しくてはしゃぐ。『はーい』は手を挙げて話しているイメージ」
はーい。弥映ちゃんです。
あのね。あたし、お菓子持ってきたんだよ。食べて」

〈主人公〉

「えっ？」

●中央

「いたずらっぽく」
お礼」

SE7 弥映が主人公にお菓子の入った袋を見せる音
【最初から最後まで流す】

なるほど。そういう事か。

そのために、来てくれたんだ。正直、嬉しい。

……かといって、あっさり認めるつもりはないけど。

主人公、弥映の目的が見えてきて、合点がいく。

同時に『お礼』という言葉についても、まだ他に思い当たる節があるものの、しらばっくれる。

やっぱり恥ずかしいのだ。

下心があるとは思われない。そんなものはないからだ。

第一、こちらはもう、挨拶しきしないだろうと思っていたのだ。

そんな相手に『どうかして仲良くなりたいたい』なんて下心を持つわけがないじゃないか。

……でも、そう思われてもおかしくない事をしたから、恥ずかしい。

弥映にはすでに、すべてバレているようだが……。

それでも知らないふりをしたい。

「『すべてお見通し』という感じで、本題に入る」

ねえ。なんかあたし。

伯父さんと伯母さんの中では『あんたを変質者から助けた親切な人』ってなっけてびっくりしたんだけど」

〈主人公〉

「え？」

●中央

「『少しにやにやと。主人公がシラを切っている事はわかっている』

よくわかんないけど、そういう出会い方した事になってるらしいよ？
靴もその時壊したんだって」

〈主人公〉

「へえ……何でだろう。何か勘違いしたのかな？」

……もちろんこれは、主人公が伯父伯母に、事実とは違う物語をでっち上げた結果だ。

主人公は正直なところ、弥映の靴の事が気になった。

あまりに痛々しく、心配な気持ちになった。

というか……あんな格好の若い女性が一人で歩いていたら、あまりにも危険だと思ったのだ。

おかしな人に目を付けられかねないし、そうだったところでうまく逃げられない。少しでも早く安全な場所へ行くべきだと思ったのだ。

そこで、主人公は逆にこれを利用する事にした。

弥映を『主人公を変質者から助けた結果靴を壊し、導かれるままこの民宿にやってきた女性』にすれば、伯父伯母はきつと手厚く扱ってくれる。

食事や、部屋を与える時に、少し色を付けてくれるだろう。そう思ったのだ。まさか、隣の部屋に宿泊させるとまでは思っていなかったが……。

● 中央

「少し間をあけてから。」

穏やかに落ち着いて、はっきりと確信があって言う」

泊まる部屋の事も。あんたが色々かけあってくれたんでしょ？

「にやにやと嬉しそうに。犯人に証拠をちらつかせるかのよう」

隣、すごい立派で。なんか不思議な力が働いてる気がするんだよねあ。

【少し間をあけてから。少し真面目なトーンになって】
もしかして。心配してくれたの?」

〈主人公〉

「……さあ? 何の事だか」

●中央

「あくまで知らないふりをする主人公が可愛い」
ふふ。

「とても嬉しいが、少し申し訳なくもある感じで。
なお、これに関しては、本当に転んで折っただけ」
靴はマジに転んで折っただけだから大丈夫なのに。

【少し間をあけてから。優しく】
ほんとに優しいね。もてるでしょ。学校でも」

〈主人公〉

「別に、そういうわけじゃ……」。

そうするのがいいって、思っただけですから。

あと、別に、モテないです。学校じゃお母さんキャラとか言われてるし」

主人公、なぜか顔が熱くなって、むやみやたらに、そして語気を強めに『モテない』を強調する。

それから、『別にそういうわけじゃ』と言ってしまった事で、本来反論すべきだったところを、結局肯定してしまったのに気づく。

弥映もそれをわかっていようだが、もう追及してこない。
さつきから負けっぱなしである。

●中央

「主人公の言っている事がほほえましくて可愛い」

あはは、お母さんキャラ？

「心から言う。つまり褒める。それから『なるほど！ 確かにわかるかも』と思っている」

それ、相当愛されてるよ。

「少し間をあけてから。少し真面目なトーンになって」

ありがとう。あんたに会えて、あたしほんとにラッキーだったな」

〈主人公〉

「あっ……。それは、どうも……」

● 中央

「少し間をあけてから。照れ笑いして」

へへ。それだけ。それが言いたくて。

邪魔してごめんね。

これは全部あげる」

SE8

弥映が主人公にお菓子の入った袋を渡す音

【最初から最後まで流す】

弥映、そこまで話し終わると、お菓子の入った袋を主人公に押し付ける。

これでは、先ほどと逆の構図である。

しかもそのまま、部屋を去ろうとするものだから、主人公は弥映の行動が意外で……。衝動的にたずねてしまった。

だって思ったのだ。『まだ戻ってほしくない』と。

〈主人公〉

「え？ もう戻っちゃうんですか？」

● 中央

「きよんとする。引き止められたのが意外で」
え？ だって、本読んでたんじやないの？」

〈主人公〉

「いいよ。……それは、いつでも、読めますし」

後になって、主人公は、よくこの時の事を思い出す。

この時、自分はなぜ弥映を引き止めたのか。

『気になりはする』し『親切にすべきだ』とは思うが、一緒にいると、自分の心をざわつかせ、落ち着かない気持ちにさせる弥映を、どうして引き止めたのか。

〈主人公〉

「それより。一緒に、食べ、よう？」

なぜ、ポリシーに反して敬語をやめてまで、一緒にしようとしたのか……。

●中央

「呼び止められたのが意外できよんとする」
いいの？ 居ても」

〈主人公〉

「……うん。よかったら、ですけど」

認めたくない話だが。それは弥映の言葉を借りれば『勘』だった。

弥映の事を何も知らないのに、その姿を見ただけで惹かれた。

なんだか、この人の事をもっと知りたいような、そんな衝動にかられた。

もしこれについて『見た目が気に入ったのか』『顔が好みだったのか』と聞かれたら、主人公には、否定のしようがない。

でも、見た目から内面を感じる事はないだろうか。

たとえば、表情とか、立ち居振る舞いとか、声とか話し方とか。そういったところから人柄を感じて、漠然と、でも強く惹かれる事はないだろうか？

一方、弥映はきよんとしている。

おそらくだが、主人公に好かれているとは思っていなかったのかもしれない。だけど……たった今、それは違っていたらしいと理解してくれたのだろう。とても嬉しそうに顔をほころばせた。

● 中央

「すごく嬉しそうに」

じゃあ。居る。

【少し間をあけてから】

ふふ。ありがとう！」

〈主人公〉

「……じゃあ、どうぞ。ここに座って」

● 中央

「とても嬉しそうに」

お邪魔します」

SE9 弥映が部屋の奥へ進む足音

【最初から最後まで流す】

SE10 弥映が指定された場所へ座る音

【最初から最後まで流す】

こうして主人公は、弥映を自分の部屋に招いた。

それから意外にも、許可をして初めて踏み込んでくる弥映の事を、なんだか可愛らしく思った。

そうだ。この人はまるで吸血鬼みたいだ。

吸血鬼は家主の許可を得ないと、人の家には入れない。

だから訪問の際は、必ず『入っていい?』と聞いてくるのだ。

弥映ちゃんは自分を人間だと言っていたけれど……正直なところ、人じゃないと言われた方がしっくりくる位、彼女はきれいで……。

私と同じ位、この田舎の民宿で浮いていた。

〈主人公〉

「どれ食べる？」

●中央

「少し緊張した様子で」

あ。

【嬉しい。だが、もらえるとは思っていなかった】

じゃあ、アイス頂戴」

〈主人公〉

「じゃあ、私もそうしようっと」

SE11 主人公がお菓子の袋からお菓子を取り出す音

【最初から最後まで流す】

主人公、弥映にアイスを渡そうと袋の中を改めて見て、驚く。

袋の中には、随分と色々入っていたからだ。

主人公の好みがわからないから、偏りのないように選んで買ってくれたのだろうか。これでは『アイス』というだけで、二つも選択肢がある。

お菓子選びに苦心する弥映の事を想像したら、思わず笑みがこぼれてしまう。

主人公、袋を開いて、弥映が好きな方のアイスをとれるようにする。

弥映は小さく頭を下げると、その中から、赤い袋に入った方のアイスバーを取った。

SE12 弥映がアイスを袋から取り出す音

【最初から最後まで流す】

●中央

「アイスを食べる」※食べるふりでOKです※
もぐもぐもぐ……。

【すごく嬉しそうに】
ふふ。冷たい。

【少し間をあけてから。主人公の顔を見てニコっとする】
おいしいね。あたし、アイスはナッツが入ってるのが好き。

【少しおずおずと。主人公好みの買い物ができたか、少し不安】

ね。あんたの好きなのはあった？

なんか色々買っちゃったんだけど」

〈主人公〉

「うん。実はこのアイスモナカ、ヘビロテしてる」

主人公、もう一つのアイスである、バニラ味のモナカを食べながら頷く。

嘘ではなく、本当に好きなアイスだ。おいしくて、思わず頬が緩む。

だけど、それを見た弥映の方が、もっと嬉しそうにするので、ドキドキする。

● 中央

【「すごく嬉しくて、声のテンションが上がる」

ほんと？ よかったあ」

……だから、恥ずかしくて、つい目をそらしてしまった。

〈主人公〉

「これは、そのコンビニで？」

● 中央

「そう。伯母さん達に場所聞いて、そのコンビニで買った」

〈主人公〉

「ですよ。この辺、この時間までやってるのはあそこしかないし。わざわざありがとうございます」

● 中央

「【とても嬉しい】」

とんでもない。喜んでくれて嬉しいよ。

【少し間をあけてから。ここで思い出したように。

自分の勘が当たっていたので、ひそかに嬉しい】

そうだ。あんたって、やっぱりこの辺の子じゃなかったんだね。今ご両親海外で、夏休みはここに預けられてるんだって？」

〈主人公〉

「あれ。なんで知ってるんですか？」

主人公、アイスを口に入れながらまた驚く。
別に知られても構わない事だが、情報が早い。

●中央

「伯母さん達が教えてくれた。

【内心少し慌てて。

根掘り葉掘り聞いて回ったやつだと思われたくない】
あ、そんな深くは聞いてないよ。

【少し間をあけてから。

勝手に情報を得た事は申し訳なく思っている。
だが、やはり予想が当たっていた事は嬉しい。なので、
言わずにはいられない】
「やっぱり勘が当たったなとは思ったけど」

……うん？ 勘？ 一体どういう事だろう。

〈主人公〉

「それはまたどうして」

● 中央

「少し思案して。根拠を言語化していく。

『勘』とは言っているが、実際は『観察眼』の方が正しい表現である」
んー。だって」

弥映、ここで主人公の顔をニコつとのぞき見ると、それから、下に向けて広げた両手の平を、主人公へ向ける。

つまり『あなたはこういった容姿をされているので……』と言いたいようだ。
そして、首をかしげて言う。

● 中央

「少し間をあけてから。適切な表現を見つける」

都会的？ ビジュアルが。

だから、旅行とかで来てる子かなって」

主人公、その言葉で理解する。

……なるほど。

勘ってよりは、こちらを観察した結果、そう思ったって事か。

空樹さ……弥映ちゃんは、つくづく、こちらの事をよく見ている。

主人公、嬉しいような、悔しいような、複雑な気持ちに襲われ、それからやはり『嬉しい』と思う。

自分の事を正しく理解してくれる人がいるというのは、なんだかそわそわして……それから、ドキドキするものだ。

〈主人公〉

「むむむ……。正解ですけど」

●中央

「正解して嬉しい」

あは。やったあ。

【少し自慢げに。当たったので誇らしい】

あたしね、何（なん）となく『こうじゃないかな』と思った事、結構当たるんだよね。

【嬉しくて、少し声のテンションが上がる】
※無垢で可愛い印象で。

『嘘っばい』『こちらを騙そうとしている』風に聞こえないようにお願いします※
あんたの事もね！ 一目見ただけで、絶対いい子だと思ったの」

〈主人公〉

「ふうん……」

弥映、嬉しそうに主人公の顔を覗き込んで言う。
上目づかいでこちらを見上げて、まるで少女のようだ。
これでは、どちらが年上なのかよくわからない。

SE13 弥映が主人公を覗き込む音

【最初から最後まで流す】

ここで、弥映の身体が、自然に少し近づく。声の距離も近づく。

● 中央 至近距離

「嬉しい。『これも』とは『主人公はいい子である』という事をさしている」
これも正解だったでしょ？」

〈主人公〉

「……まあ、そうかも？」

主人公、ますます恥ずかしくなる。

なんだか、随分と、人の事をほめる人だ。

これ以上私をいい気分にしたって、もう、融通してあげられる事なんてないんだけど。

……だからもし、この人がそれを期待しているなら、私は『間違いだ』って言いたい。
でも、この人は、別にそういうつもりで言っているわけではないような気もする。

だって、ただ本当に……自分のインスピレーションが正しくて、喜んでいるような顔をしてる。

勝手にうがった見方をして、警戒している私の方が、よほど悪人に思えるみたい……。

●中央 至近距離

「嬉しい。照れ笑いして」
へへ。

【少し間をあけてから】

……あれ、この本」

〈主人公〉

「知ってるの？」

そこで、急に話題が違う方へ向かう。

弥映が、布団の上に置いたままの本に関心を持ったのだ。

主人公が思うに……。

失礼ではあるが、弥映は読書しそうなタイプには見えなかった。

小説や書店、図書館にはちっとも縁がなくて、いつも人と楽しく会って遊んでいて、盛り上がって……みたいなの。

そんな人物だとばかり思っていたのだが……。

SE14 弥映が本を手取る音

【最初から最後まで流す】

●中央 至近距離

【ごく自然に】

うん。あたしも読んだ事ある」

〈主人公〉

「えっ？」

だが、それは主人公の誤った思い込みであつたらしい。

●中央 至近距離

【嬉しい。主人公と趣味が合うらしいと知ってテンションが上がる】
懐かしいなあ。結構古い本だね。

【声のテンションは全く変わらない。

だが、ここで本の内容を思い出す。

当たり障りのない話にとどめて、話を変えようと考える】

この人の小説、いつも表紙の写真が綺麗だよね。
あたしも、あんたよりちよっと上位（うえくらい）の年の時に、ジャケ買（が）いして
はまったんだ」

弥映は意外なほど、この本についてよく知っていた。

その目は懐かしそうに表紙を見つめ、手は、ソフトカバーを優しく撫でている。
それを見て主人公は、弥映が本当の事を言っているのだと理解した。

〈主人公〉

「そうなんですか！

弥映さ……弥映ちゃんも、この作家さんが好きな、の？」

●中央 至近距離

「声のテンションは全く変わらない。楽しく会話している。

だが、内心『この話続いているの？ 振ったのは自分だけど……』と思っている。

ひとまず、主人公があまり恥ずかしい思いをしないように、自分も割と熱心な読者だった事を伝える」

うん。好き。この人が出してる本、大体読んだと思う」

だが、主人公は、この時弥映の表情が、少しだけひきつっている事には気づいていない。

何せ十年前の本と、その頃に流行っていた作家なのだ。

誰かと語り合いたいほど好きなのに、ずっと読者仲間がいなかった。

過去に書かれたレビューを、インターネットで読む事は出来た。だが、リアルタイムで読んでいる仲間、あるいはリアル元読者は、今日まで見つけられなかったのである。だから、つい興奮して、話を進めてしまう。

〈主人公〉

「実は私もファンで！」

この人の本、全部読みたいって思ってるんです。

でもおっしゃる通り、ちよつと古い本が多いので、手に入りにくくて……。

あの、弥映ちゃんはこの作家さんの本で特にどの本が」

● 中央 至近距離

「主人公が可愛くて笑顔になる。」

相変わらず、声のテンションは全く変わらず、楽しく会話している。

正直、この話をもっと聞きたい。読書の話がしたいと思っている。
そうなんだ。

【少しだけからかうように。

これ以上は話がまずい方向に行きそうである。

だが、主人公がそれに気づいていないのを心配して、ストップをかける」
でもいいの？」

〈主人公〉

「へ？」

●中央 至近距離

「【少し楽しそうに】

この話掘り下げて。

【からかいたくはあるが、主人公を傷つけたくはない】

振ったあたしが言うのもアレだけど」

〈主人公〉

「えっと……。あ」

ここで、主人公はようやく、自らの過ちに気づく。

自分はすっかり盛り上がっていた。

だが、そんな自分を、弥映がちよっと困ったように、でも氣遣うように見ていた事で……。やっと事態を把握したのだ。

そうだった。この人の本は、ヤングアダルト小説として人気を博したが――……。

● 中央 至近距離

「『できるだけ何でもない事のように言う』

この人の本って、パツと見おしやれだけど、どれもエロいよね。

『あくまで、何でもない事のように言う』

特にこれは相当どぎつい方だし」

〈主人公〉

「あっ……あっ……あっ……」

ああ。私ってば、また……！

これじゃあ、またからかわれる……！

主人公、恥ずかしさでおかしくなりそうになる。

興奮のあまり、基本的な事をすっかり忘れてしまっていた。

そうだ。この人の本は、相当にいやらしい。

なぜだか知らないが、サービスか何かなのか。とにかく、どの本にも、必ず性描写がある。親に『ネット書店で注文して』と頼めないのも、うっかりあらすじなど読まれようなら、大変だからだ。

だから、一人でこっそり読んでいた。お気に入りの性描写を繰り返し目でたどりながら、『インターネット上はともかく、この話をリアルに誰かとするのは、きっと難しいだろう』と思っていたのだ。

なのに……。

なんでこんなにあつさり、好きな事をばらしちゃったんだろう。

恥ずかしい。恥ずかしい恥ずかしい。

雑誌の件もあるし、これじゃ絶対、エロい事ばかり考えてるバカな子だと思われる……！

一方弥映は、真っ赤になっている主人公を見ているうち、思わず笑顔になってきた。
お堅そうदैて、実際は性の話題に興味津々な主人公の事が、ますます可愛く感じられてきたのだ。

●中央 至近距離

「主人公が可愛くて、思わず笑ってしまう」
ふふっ♡

【少し間をあけてから。少し呆れつつも優しくからかう。

『もおあんたってさあ』は『もお、あんたってさあ』をつなげて言う」
もおあんたってさあ。すっごい真面目でお堅そうなのに。

【優しくからかう。思わずほえましくなってしまう】

実はやらしい事ばっか考えてるでしよ。

【少し間をあけてから。『そんなの当たり前だ』という感じで。

主人公をフォローしたい】

でも女もあるよね。普通に性欲。

【河原の件をさしてからかう】

まあ、あんま外ではバラさない方がいいけどね」

〈主人公〉

「え……?」

主人公、弥映の言葉が意外で驚く。

何せ二回目だ。一日のうちに二回も、自分は性的な本を見ているところを見られたのだ。いよいよしつこくいじめられたり、笑われたりするのだとばかり思っていたのである。——でも、そうじゃなかった。

それどころか、何の問題もないみたいに受け入れられて、心配までされている気がするのだが……。

●中央 至近距離

「きよんと補足して。主人公が話を理解していないようなので。

『ゆった』は『言った』の意味」

ゆったじゃん。おかしな人が声かけてきたら大変だよって」

〈主人公〉

「それだけ?」

だから、それが信じられなくて、つい追及してしまう。
でも……。

●中央 至近距離

「普通に頷く。なぜ『それだけ?』と質問されるのかわからない」
うん。それだけ。

「少し考えてから。主人公が、『人前でアダルトな本を読むリスクはそれだけか?』と質問しているのかと勘違いしている」

後はまあ、信頼できる人とならいいんじゃない?
そういう話(はなし)しても」

〈主人公〉

「本当にそれだけ!」

●中央 至近距離

「『どうしてそんなにしつこく確認するんだ!』という感じで」

※大きな声にはならないようにお願いします※
ほんとにそれだけだってば!」

そう。実際問題、弥映は本当にそれ以上の事を考えていなかった。

主人公が深読みをしすぎていただけで『本当にそれだけ』だったのである。

だから、疑り深くて、警戒心の強い主人公も、さすがに理解してくる。

もしかするとこの人は、発言にいちいち含みがあるようで、実際はちつともそうじゃない。

いつも思ったまま、感じているままと、素直に、他意なく話しているだけで。それを疑わしく思うのは、自分の心がひねくれているだけなのかもしれない――……。

こうして、主人公がようやく弥映の人柄を理解しかけた中、当の弥映は、ここでようやく主人公がしつこく『本当に?』と聞いてきた理由を理解していた。

●中央 至近距離

「『ここでもうやく『本当にそれだけ?』』という言葉の意味を理解する」

あ、なるほどね?

【にやにやとからかう】

わかった。

バレたら何（なん）かされるところだったんだ」

〈主人公〉

「う……」

●中央 至近距離

【笑いながら。『そんなの当たり前だ』という感じで
しないよ。

【これに関する根拠を述べ、主人公を安心させようと思っている】
ていうかあたしも読者だし。

仮にエロいのが罪（つみ）なら、あたし達同罪（どうざい）じゃない？」

〈主人公〉

「あ……。そつ、か。なるほど」

主人公、その言葉で、ストンと腑に落ちる。

確かにそうだ。

ていうか、だから、あえて弥映ちゃんは『自分も熱心な読者だ』って強調してくれたんだろうか。

……ああ。私はこの人の事を、隙あらばこちらにマウントを取りに来て、いかにも小馬鹿にして、年下扱いしてきそうなタイプだと思っていた。

リアルに嫌な目に遭った事なんかない癖に、フィクションの世界で見た嫌な感じの女の人達だけを見て、現実の女の人の事を判断して。

『弥映ちゃんみたいに派手な見た目の、大人の女の人なんて。きっとみんな、私、つまり、えつちな事が気になってしょうがない年下を、バカにするんだろう……』って、思い込んでいた。

……だけど、それは全然違った。

フィクションをただただで現実を理解した気になって、間違った解釈をしていた自分が、すごく恥ずかしい。

でも、それでもこの人は、怒らないでいてくれるんだ……。

これによって、主人公の心は大きく動く。

主人公はこう見えてなかなかの厨二病で、理不尽に押さえつけられたり、むやみに子ども扱いされたりすると、激しく反抗したくなるほうだ。熱くなつてレスバをしてしまう。

でも、弥映はそうしない事がわかった。

弥映は年上らしくない代わりに、こちらを年下扱いもしない。

小さな女の子のように無防備な笑顔を見せたかと思つたら、急に、そのくせ自然に、大人の女性としてこちらを肯定してくれる。

その度に、主人公の心は乱される。

そうだ。弥映と話していると、主人公は自分の年齢を忘れてしまいそうになる。

それは、すごく不思議で、未知の感覚だ。

でも、すごく自分らしくいられるような気もする。

弥映は主人公に『あなたはこうあるべきだ』と、役割を押し付けてこないからだ。

正直言つて、それが心地いい。

私、実はこの人の事、好きかもしれな……。

〈主人公〉

「そっか……」

●中央 至近距離

「ホッとしている主人公が可愛い」

あはは。めっちゃホッとしてる。

「声音が優しく変わり、主人公をドキッとさせる」

可愛いね。

「元の声音に戻る。『多分、それ』をくっつけて言う」

さっきもてないって言ってたけど。多分それ気付いてないただだよ」

〈主人公〉

「え？」

だがここで、話はさらに意外な方向へ転んだ。

主人公はこれについて行けず、きょとんと弥映を見上げる。

そして弥映は、まったく悪びれず、しれっと、また主人公を驚かせた。

●中央 至近距離

「しれっと。あっさり言う」

だってあたし、あんたみたいな人好きだもん」

〈主人公〉

「……っ！ それはどういう……」

●中央 至近距離

「平然と。とても『泣きそうだった』とは思えない口調で、先ほどの事を思い出して話す」
さつきさあ。ほんとは地味に泣きそうだったんだよね。

道わかんないし足痛いし。

【少し間をあけてから。嬉しそうに】

でも、あんたが助けてくれた。ほんとに神様かと思った。

【※マークまで、口調は自然だが、心から尊敬して言っている】

普通にすごいって思ったんだ。

あんな風に、自然に人に優しくできる事。

しかも、会ったばかりの怪しい女に。 ※

【少し間をあけてから】

……だから」

その時、弥映の身体がもう一步近づいて、主人公の視界がかげった。主人公は少し薄暗くなった部屋で、弥映の顔を見つめる事しかできない。その顔を、言葉を。素直に好きだと思ったからだ。

それから……すごく、いい匂いがする。

●中央 至近距離

「小さく微笑み、ほんの少し含みを持たせて」
気が変わった。やっぱり何（なん）かしてみるのもいいかも」

SE15 弥映が主人公に近づく音

【最初から最後まで流す】

そして弥映は、そのまま主人公の左耳に顔を寄せて、ささやく。
主人公は突然の事に、何も考えられずにいる。

●●左 ささやく ※マークのセリフまでささやく

「ぼそっと。まったく悪びれずに」

しよっか。本に載ってるみたいな事」※

弥映、そう言うのと、一度主人公の耳元から離れ、髪の毛を耳にかける。それから、布団に置かれた本を見下ろし、目を細めて笑った。

●中央 至近距離

「……だって」

弥映の言葉が一度止まる。

だから、まだ、これからなんと言うかは確定していない。

だけど主人公は、弥映の次の言葉を、すでに察していた。なぜなら、その本に書かれているのは。

それから、主人公が河原で見ていたのは……。

●中央 至近距離

「淡々と事実を伝える」

ここに書いてあるのも。あんたが川原で夢中になって見てたのも……」

弥映の身体が、もう一度近づく。

主人公は逃げられない。

これから何と言われるかわかっていて、それでも弥映から離れられない。

● ● 左 ささやき ※マークのセリフまでささやく

「淡々と。からかったり、笑っているような感じにはならないようにする」
女同士のセックスでしょ？」 ※

ここでフェードアウトして終了。